教育シリーズ——第18弾

尼崎・そろばん特区「杭瀬小」と横浜「神林そろあん教室」の実践

芥川賞作家が驚愕！「そろばん」の劇的学力効果

いま学校・教育の現場で「そろばん」が改めて注目されている。算盤を使うことで暗算を中心とした計算力だけでなく、集中力やイメージ力など驚くべき「右脳開発」効果をあげ、劇的な「学力向上」をみるというのだ。

藤原智美
Tomomi Fujiwara

日本初の「そろばん特区」モデル校となった杭瀬小学校は、大阪の西隣に位置する兵庫県尼崎市にある。

なぜ、いま「公立小」で算盤の授業をするのか

いま小学校の授業にはパソコンが必需品になりつつある。見学したほとんどの学校ではパソコンルームを設けていて、さまざまな授業に活用していた。けれどこれは過渡期の一時的な風景にすぎない。これからはそのパソコンルームも解体されて、一人ひとりがタッチパネル式のタブレットPCを持つようになる。さらにチョークと黒板は消滅し、児童は電子ボードをまえにして授業を受けるようになるだろう。

このように教育現場におけるIT化が急速に進展しているなかで、それとは逆行するような古めかしい道具で、学力低下を食い止めようとする学校があらわれた。兵庫県尼崎市にある市立杭瀬小学校では、なんと算盤（そろばん）を使った授業を年間五〇時間も実施しているのだ。それは「九九」を覚えた二年生の三学期から六年生までつづく。合計二〇〇時間をこえる本格的な算盤の授業である。

社会はとうの昔に算盤を必要としなくなっている。にもかかわらず、ゲーム機器やケータイを使いこなす現代っ子たちに、なぜいま算盤なのだろう。アメリカでは単純な計算は電卓にまかせていい、という方針の小学校も少なくないという。杭瀬小は教育界のドン・キホーテになろうとしているのか。

学校はJR尼崎駅から車で五分ほどのところにあった。さっそく明坂正春校長の案内で四年生の授業を見学することにした。教科の名は「計算科」という耳慣れないものだった。

教室に入ると、そこには一時代まえの凛とした教室の雰囲気が漂っていた。子供たちは背中をすっと伸ばし、静かに授業開始を待っている。机の上には算盤が置かれている。それも全員、机の左端に縦置きできちんとそろえていた。そして

撮影＝熊谷武二、加藤雅昭、永井 浩、永野一晃